或問　WAKUMON　1
No.33,（2018）pp.1-12

江戸時代における王羲之書跡の舶載と普及

松浦　章※

要旨：東晋時代の書家であり、書聖と称せられる王羲之は、楷書・行書・草書の格調高い調和の整った書法を確立したことは周知のことである。とりわけ現代においてもその模写作品である「蘭亭序」、「喪乱帖」が、多くの書家や愛好家から慕われている。

そこで、本論文において、その王羲之の書跡の模写した作品が、清代中国から江戸時代の日本にどのように伝来し、また日本においてその普及に関して述べてみたい。

キーワード：王羲之　書跡　清代　唐船　長崎貿易　普及

一、緒言

清朝中国と江戸時代の日本との関係は、九州の西北部に位置する長崎に中国帆船が来航する形態で、17 世紀中頃から 1861 年までほぼ 200 年にわたって交渉が行われていた。中国帆船によって中国産の物資がもたらされ、長崎で交易されると、中国帆船は長崎において交易で得た日本産の物資を搭載して帰帆する貿易形態がほぼ 200 年間にわたって続けられたのである。[1]

中国帆船が中国から日本へ舶載したものには、中国産の絹糸、絹織物、砂糖、漢方薬剤、書籍などあり、これらを長崎で交易し、日本からは銅、海産物などを購入して帰帆したのである。中国側が最も求めた物は日本産の銅である。中国では幣制が銀兩と銅銭の両方によって運用され、国内で不足する鋳造貨幣の原料となる銅を、国内の雲南省から産出する銅[2]よりも、沿海部では距離的にも近い日本に供給を求め、康熙五十五年（1716）当時、日本からの輸入銅が 62.5%であったのに、雲南銅は 37.5%の割合を占めていたのであった。[3]そのため江戸前期には数十艘の日

※ 松浦章（MATSUURA Akira, 1947-）關西大學東西學術研究所客員研究員/關西大學名誉教授、關西大學文學博士、關西大學博士（文化交渉學）。

[1] 山脇悌二郎『長崎唐人貿易の研究』吉川弘文館、1964 年 4 月、1-322 頁。
松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』思文閣出版、207 年 7 月、1-449 頁。
松浦章著・張新芸譯『清代帆船與中日文化交流』上海科学技術文献出版社、2012 年 1 月、1-345 頁。

[2] 嚴中平編著『清代雲南銅政考』中華書局、1957 年 10 月、1-100 頁。

[3] 松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』思文閣出版、2007 年 7 月、111 頁。
松浦章著・張新芸譯『清代帆船與中日文化交流』上海科学技術文献出版社、2012 年 1 月、72

本で“唐船”と呼称した中国帆船によって持ち帰られ、銅は沿海部のみならず北京の鋳造局へも送られ、康熙通宝、雍正通宝、乾隆通宝などの銅銭の鋳造貨幣に供せられたのである。

このような唐船の長崎来航によって中国から舶載された輸入品の中に書籍があり[4]、書道関係の書籍や法帖[5]なども大量にもたらされ、日本の書道界に伝統的な和風の書道から唐風書道の勃興に大いに影響を与えたのである。その中国の法帖の中に、書聖と呼称された王羲之の法帖も含まれていた。[6]

そこで本論文では、王羲之書跡に関する書跡の日本渡来と日本での普及の事情を探ってみたい。

二、江戸時代の長崎における中国貿易

清朝は。嘉慶年間に編纂した嘉慶『大清會典事例』において、朝貢関係に無い日本を「互市國」として、會典の中に記載している。

嘉慶『大清会典』巻三十一、礼部に次のようにある。

> 互市諸國、曰日本國、即倭子、在東海中、與中國貿易、在該國長崎島、與普陀東西對峙、由此達彼水程四十更、厦門至長崎、北風由五島入。南風由天堂入、水程七十二更。[7]

互市国の日本は東海の中にあるが、中国との貿易を日本の長崎で行っていると記した。[8]

これに対して、唐船が出帆する中国側の港であるが、17 世紀前半から 18 世紀の前半までは、中国大陸沿海各地から長崎に来航していた。しかし日本側の長崎来航の唐船数の制限が強化されて 10 余隻程度となった 18 世紀の中頃から幕末までのおよそ 100 年間は、浙江省嘉興府平湖縣乍浦鎮が対日貿易の中心地となった。[9]そのことは、道光『乍浦備志』巻十四、前明倭變において、清代の乍浦と日本との結びつきを明確に記している。

> 以彼國銅斤、足佐中土鋳錢之用、給發帑銀、俾官商設局、備船由乍浦出口、放洋採辦[10]

頁。

[4] 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所、1967 年 3 月、1-744、1-60 頁。

大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』同朋舎出版、1984 年 6 月、1-636 頁。

[5] 馬成芬『唐船法帖の研究』清文堂、2017 年 4 月、1-198 頁。

[6] 馬成芬『唐船法帖の研究』清文堂、2017 年 4 月、97-109 頁。

[7] 『欽定大清會典（嘉慶朝)』近代中国史料叢刊三編、第 64 輯、1357 頁。

[8] 松浦章「清代嘉慶年間

[9] 松浦章『清代海外貿易史の研究』朋友書店、2002 年 1 月、98~1117 頁。

松浦章著、李小林譯《清代海外貿易史研究》上、下、天津人民出版社、2016 年

[10] 『中国地方志集成・郷鎮志専輯 20』江蘇古籍出版社、上海書店、巴蜀書社、1992 年 7 月、229

とあるように、日本産の銅が中国国内の鋳造貨幣のために必要であり、その銅を購入するために、官商が選定され乍浦から東を目指して日本へ赴いた。さらに同書には、船舶の運航形態に関しつぎのように記している。

尋分官・民二局、局各三船、毎歳夏至後小暑前、六船装載閩・廣糖貨、及倭人所需中土雑物、東抵彼國。[11]

官局と民局が設けられ各局が三隻の船を毎年の夏至のあと小暑前に、計六隻の船に福建や廣東産の砂糖や日本人の求める中国の様々な品々をもって東の日本へ赴いたとされる。対日貿易船の運航の時期である夏至から小暑までは、現在の 6 月 20 日前後から 7 月上旬までの時期に相当する。この 20 日間の頃に乍浦から日本に向けて出帆した。その運航の日程について、さらに同書に、

西風順利、四五日即可抵彼。否則十餘日三四十日不等。[12]

とあり、西風が順調であれば四日か五日で日本に到着した。しかしそうでなければ 10 餘日から 3,40 日を要することもあった。そしてこれらの船の帰帆は、同書に、「九月中、従彼國装載銅斤、及海帯・海参・洋菜等物回乍浦」[13]とあるように、九月中に帰帆するのが恒例で、日本産の銅や昆布や干し海鼠などの乾物海産物を積載して戻ってきたのであった。

そして、再び日本に赴く。同書に、

起貨過塘訖、仍復装載糖貨等物、至小雪後大雪前、放洋抵彼、明年四・五月間、又從彼國装載銅斤及雑物回乍。通年一年兩次、官辦銅斤共以一百二十萬觔爲額、毎一次各船分載十萬觔。[14]

とある。日本から帰帆して積荷の荷卸しが終わると、再び砂糖などの貨物を積載して小雪後から大雪前に、即ち現在の 11 月下旬から 12 月上旬までの 20 日間ほどの間に日本に向けて出帆し、翌年の四、五月頃にまた乍浦に戻るとの運航形態であった。この場合も日本から銅や様々な物を乍浦にもたらした。このように一年に 2 回の帆船航運が行われていた。そして日本から中国へもたらされる銅は、一艘当たり 10 万觔約 60ton で一年に 120 万觔 7,200ton あったと記している。

他方、長崎における中国貿易の江戸時代前期の形態は、次のように行われていた。

頁。

[11] 同書、229～230 頁。

[12] 同書、230 頁。

[13] 同書、230 頁。

[14] 同書、230 頁。

唐船商賣之儀は前々唐人共町宿仕、唐人相對にて商賣仕、[15]

（唐船による商売のことは、以前は唐人達が長崎市中の「町宿」（個人の家々）において滞在し、唐人と日本人との合意による直接取引によっておこなわれていた。）

とあるように、唐船との交易に関して、長崎に来航して唐船の乗員は長崎の市内の町家に宿泊し、交易は相対交易、物々交換を基本とするものであった。その後、清朝の展海令の発布によって唐船の長崎来航数が一年に二百隻に近くなると、長崎での混乱も避けるため、徳川幕府は元禄二年（1689）より唐人屋敷、“唐館”を設置して、来航の中国人を全て、その唐館の中でのみの長崎滞在を許可したのであった。[16]さらに唐船数の制限を厳しくするため、新たに貿易方法を改正し、正徳五年に海舶互市新例いわゆる正徳新例を施行し、来航唐船の各船主に“信牌”を給付する施策を実施したのである。[17]長崎奉行から給付された信牌を所持しないで長崎に来航する唐船の交易は不許可とし、直ちに帰帆を命じたのであった。その後も、日本産銅の減少もあり、来航唐船数の制限が加えられ、寛政の新法実施によって、毎年の長崎来航唐船数が十隻に制限[18]され、その後は大きな変化がなく幕末まで継承された。

三、長崎貿易における王羲之書跡の舶載と普及

1)唐船舶載書籍と和刻本

江戸時代において中国から輸入された書籍の事情がどのようなものであったかの一例として、清代の江南の年中行事に関する書籍の一つである『清嘉録』の輸入とその日本の再版本との関係から見てみたい。

中国の年中行事を記した書籍に、北京を中心に記した光緒三十二年（1906）刊『燕京歳時記』が有名であるが、江南の年中歳時記として著名なものに『清嘉録』がある。この本が江戸時代の日本に舶載されている。

『清嘉録』の宛山老人の序において以下のように記している。

吾呉古稱荊蠻、自泰伯虞仲以來、變其舊俗、爲聲名文物之邦、陸士衡所云、士風清且嘉者、

---

[15]『長崎雑録』乾。寛政三年商法改正。

[16] 松浦章「清「展海令」施行と長崎唐館設置の関係」、『関西大学東西学術研究所紀要』第41輯、2008年4月、47-61頁。

松浦章『近世東アジア海域の文化交渉』思文閣出版、2010年11月、31-50（1-448）頁。

[17] 松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』思文閣出版、2007年7月、98-121頁。

松浦章著・張新芸譯『清代帆船與中日文化交流』上海科学技術文献出版社、2012年1月、63-79頁。

[18]『長崎雑録』乾。寛政三年商法改正。

迄於今、文采風流、爲天下冠、然江湖雄闊、川澤沃饒、雜處五方、商賈輻輳、世運遷流、風會不無少靡、吾家鐵卿薈萃羣書、自元日至於歲除、凡呉中掌故之可陳、風謡之可采、莫不按節候而羅列之、名之曰清嘉禄。

『清嘉録』は呉中すなわち蘇州を中心とする江南の年中の風俗を述べた書籍である。この本が、中国から日本にもたらされ、日本で和刻本が作成された。和刻本『清嘉録』の出版の事情を語るのが、天保八年（道光十七、1837）八月付の朝川善庵の序である。次のその全文を掲げてみたい。

清嘉録序

近刻清人詩集、舶到極多。以余所見、尚有二百餘部、而傳播之廣且速者、莫顧君銕卿頤素堂詩鈔若也。梓成于道光庚寅首夏、而天保辛卯三月、余得諸江戸書肆玉嚴堂、蓋冬幫船所致也。夫隔海内外、而商舶往來、一年僅不過冬夏兩度、又且長崎之於江戸、相聚四十日程而遠。然而、其書刻成不一年、自極西而及於極東、所謂不脛而走、是豈偶然哉。今誦其詩、各體鹹備、眾妙悉臻、彬彬風雅、比興不墜、如詠古諸什、最多傑作、皆中晩唐人之詩、宜其行遠而傳世也。未又附清嘉録十二卷、蓋紀呉中民間時令也。呉古、楊州地、東際大海、西控振澤、山川衍沃、水陸所湊、唐宋以來、號稱繁華之區、亦江南一大都會也。如星野山川城郭土田人物食貨災祥藝文之類、縣誌邑乘、或能詳之、至其歲時瑣事、則略而不言、即一二言之、亦不致詳細、蓋恐其涉蕪雜也。然土風民情、於是可見、則其所關係、亦自不小、豈可闕哉。古有采詩之政、以觀民風、今無其政、又無其詩、在上之人、何以周知天下風俗、而移易之、然則、紀其土風、以備采擇、亦古人貢詩之意也。顧君、詩人也。其合而刻之、意或在斯乎。故于土俗時趨、推其來由、尋其沿習、慎而不漏、該而不侈、考（巧）證精確、纖悉無遺、然後、土風可以觀、民情可以知矣。是在上之人、固所欲聞者也。若其廣耳目而資學問、抑又餘波所及、而余輩受賜多矣。余私心窮謂、填海為平地、縮地為一家、倘獲親接塵教、聞所未聞、不知當何如愉快也。悵矣心飛、無翼何致、徒付一浩歎耳。豈意君亦謬聞余虚名、壬辰五月、扇頭題詩及畫、託李少白、以見寄示、且請題詞於清嘉録、余才學謭劣、何能任之、然傾、慕之久、又何可無一言題簡端、以結知縁、於是、與二三子相謀、先將翻刻其書、更為叙行之、而余適嬰大疾、瀕死數矣。至今、筆硯荒廢、塵積者三四年、以故、遷延度歲、不果其志、深以為憾、久居安原三平、好學樂善、勇乎見義而為、一日慨然謂余曰、顧君之于先生、可不謂相知乎。而吾亦妄承先生曲知久矣。若無知於知、何以相知之為、吾當為先生代刻之、庶幾其不負相知哉。遂捐俸授梓、今茲丁酉七月、校刻竣工、適又聞甲斐門人大森舜民、亦將刻頤素堂詩鈔、今與斯書合而行之、其傳播之廣且速、亦如前日自西而東、海之内外、無所不至、豈不愉快哉。

然後、乃知顧君必不以餘為負相知、抑亦二子之賜也。因序。五十七歳[19]

天保八年丁酉八月、江戸後學朝川鼎譔菱湖巻大任書。

この序を記した朝川善庵に関して若干触れておきた。朝川善庵は、天明元年（1781）に生まれ嘉永二年（1849）に没した江戸後期の儒者であり、名は鼎、字は五鼎、号は善庵と称した。江戸中期の儒者であった片山兼山の末子として生まれたが、幼時において父を失い、母の再婚先であった医者朝川默翁に養われる。十二歳で山本北山に折衷学を学び、寛政十年（1798）から京坂・九州各地を遊歴し、幕府の招きで下田に漂着した清国船と筆談応対している。[20]

朝川善庵は、この『清嘉録』の安原寛等の校訂本翻刻に際してこの序を寄せたのであるが、この冒頭で「近刻清人詩集、舶到極多。以余所見、尚有二百餘部、而傳播之廣且速者、莫顧君鋏卿頤素堂詩鈔若也。梓成于道光庚寅首夏、而天保辛卯三月、余得諸江戸書肆玉嚴堂、蓋冬幫船所致也。夫隔海内外、而商舶往來、一年僅不過冬夏兩度、又且長崎之於江戸、相聚四十日程而遠。然而、其書刻成不一年」と記し、最近において清人の「詩集」が唐船によって極めて多く輸入され、善庵の知るところでも「二百餘部」に及び、その伝搬が広範囲でしかも伝来が早いことに驚いていた。その典型として、「顧君鋏卿頤素堂詩鈔」があるとしたのである。この書は「梓成于道光庚寅首夏、」すなわち道光庚寅年、道光十年（1830）に刊行され、その翌年「天保辛卯三月」すなわち道光十一年、天保二年（1831）には善庵が「余得諸江戸書肆玉嚴堂」と、江戸の書肆であった玉嚴堂において購入したとしている。その舶来の理由として「蓋冬幫船所致也」として、刊行された年の冬船で日本にもたらされたと推察したのである。しかも一年足らずで日本にもたらされ、しかも「長崎之於江戸、相聚四十日程而遠」と、長崎から江戸までの輸送に必要な日数が四十日もかかったのにもかかわらず、「其書刻成不一年」と極めて早き時間で刊行されたことに驚きを禁じ得なかったのである。

すべてがこのように迅速に日本で再版本が出版されたのではないが、江戸時代の人々は中国の書籍に高い関心を持っていた。

2) 王羲之書跡の舶載と普及

江戸時代の書家がどのように名跡を学習したかに関して、元文四年（1739）に松下烏石は『書法群碎』の「學書法」に、書家が書を自習する方法として次のように記している。

---

[19] 『楽我室遺稿』巻二に「清嘉録序」として収録され、冒頭は和刻『清嘉録』の序と同じで「抑亦二子之賜也。因序。五十七歳」で終わっている。

朝川善庵の序は中国で刊行された『清嘉録』江蘇地方文献叢書、江蘇古籍出版社、1999年8月、序4〜6頁にも収録されている。

[20] 松浦章編著『文化十二年伊豆漂着南京永茂船資料』関西大学出版部。2011年2月参照。

凡學書、從法帖入、置之几上、懸之座右、朝夕諦観、以思其運筆之理、而後可以模臨焉。[21]

書法を習得するものは、座右の書として「法帖」を用い、これを手本とし臨書し模写することを基本としていたことがわかる。このように法帖は、書家の手本として普遍的に利用されていた。しかし、その法帖は容易には入手出来ない。とくに中国の名跡の書となればなおさらで、長崎に輸入された中国法帖の入手を苦労して考えたことは吝かではない。この事情は、先の朝川善庵が指摘した事情とも同様で、輸入原本はとても高価であり、将軍家や大名藩主でなければ容易に入手は困難であった。

その代表的な手本とされたのが王羲之の書跡であったが、江戸時代においては、時間的にも国も違う空間的にも相違し、真蹟の入手すら困難であった。しかし、王羲之の書跡に関する法帖類が江戸時代の日本に舶載されたことは、すでに馬成芬博士が解明されている。[22]

馬成芬博士の成果によれば、王羲之の書跡を含めた集帖が、江戸時代の日本に輸入された状況を整理されている。[23]王羲之の書跡を収録した集帖は、日本に輸入された種類は 22 種類あり、宋代の法帖である『淳化閣帖』が 36 部輸入された。『淳化閣帖』は、宋淳化三年（992）に歴代名跡を集た十巻からなる法帖である。その中で、王羲之の書跡は三巻、その子王献之は二巻、王親子のみで五巻となりその半数を占めている。[24]

この中で最も時代の新しいものが、錢泳摹勒の嘉慶十三年（文化 5、1808）刊の『詒晋齋法帖』4 巻 16 帖である。文化 4 年（1807）に申一番船によって 7 部、嘉永 2 年（1849）11 部、嘉永 5 年（1852）子三番船 1 部、合計 19 部が輸入されていたことがわかる。[25]

詒晋齋法帖　文化七年（1810）午四番船　二十部各一箱八帖　一部御用
　乾隆帝十一皇子成親王各體法帖云々[26]

詒晋齋法帖　文化七年午七番船　　一部大炊頭、一部伊豆守　六部各一箱八帖[27]

詒晋齋法書　文化九年申一番船　初集、二集、三集、三集、壹部四帖拾六帖[28]

詒晋齋帖　　嘉永二年申四番船　六拾目　十部各一帖[29]

---

21 西川寧編『日本書論集成』汲古書院、1978 年 1 月、165 頁。
22 馬成芬『唐船齎來法帖の研究』清文堂、2017 年 4 月、97-109 頁。
23 馬成芬『唐船齎來法帖の研究』清文堂、2017 年 4 月、100-102 頁。
24 馬成芬『唐船齎來法帖の研究』清文堂、2017 年 4 月、101 頁。
25 馬成芬『唐船齎來法帖の研究』清文堂、2017 年 4 月、101 頁。
26 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』424 頁。
27 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』、424 頁。
28 同書、427 頁。
29 同書、531 頁。

詒晋齋　　嘉永二年天草難船　三匁　一部二帖[30]

詒晋齋　　嘉永五年子三番船　三拾目　一部三套[31]

『詒晋齋法帖』は出版された嘉慶十三年（文化 5、1808）からまもなく文化七年（嘉慶 15、1810）には長崎にもたらされ、その後も、嘉慶五年（咸豊 2、1852）まで輸入されている。この『詒晋齋法帖』に王羲之の書跡が収められていたから、このように出版から早く輸入されたかは不明であるが、日本人の中国書家の書跡に関心が高かったことを彷彿させる一例と言えるであろう。

これに対して、王羲之の名を冠したその書跡の輸入はどのようであったろうか。王羲之の名を冠した書籍、法帖が江戸時代にどれほど輸入されていたのであろうか。大庭脩氏の調査にもとづいて次に掲げてみた。なお王獻之のものもともに付した。

享保二年　王羲之蘭帝記　一部一帖

王羲之太上黄帝内經　一部一帖

王羲之鵞群帖　一部一丁

享保四年　王羲之佛遺教經　一部一帖

王羲之薦福碑　一部一帖[32]

享保四年九月　第二十二番南京船主沈補齋

王右軍黄庭經　一帖

王右軍遺教經　一帖

王右軍興福寺碑　一帖[33]

元文二年　王羲之快雪堂法書　一部一帖

宝暦六年　王羲之草訣百韻歌　一部一帖[34]

宝暦十三年　王羲之黄庭經　一部一帖

王羲之十七帖　一部一帖

王羲之聖教序　一部一帖

天明三年　　王羲之草訣偏旁辨疑　一部一帖[35]

文化九年　申一番唐船持渡別段賣

---

[30] 同書、553 頁。

[31] 同書、572 頁。

[32] 同書、676 頁。

[33] 同書、243 頁。

[34] 同書、676 頁。

[35] 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』、677 頁。

王羲之草書　　下野守　壹部一帖

王羲之古草訣帖　下野守　壹部一套四帖[36]

天保十三年　寅二番船　淳化帖之内　王羲之帖　二帖　不

寅二番船　淳化帖之内　王獻之帖　一帖　不

寅二番船　拾五匁　淳化帖之内　王羲之帖　一帖　不

寅二番船　淳化帖之内　王獻之帖　一帖　不[37]

弘化二年　巳三番、四番、五番船　拾匁　遺經帖　一部一帖[38]

嘉永四年　亥四番船　　八匁五分　遺教經　五部各一帖[39]

以上から見られる限り、王羲之の書跡に関する舶載の最初は享保二年（康熙 56、1717）になる。その後、嘉永四年（咸豊元、1851）まで舶載されていたことが知られる。

とりわけ舶載した唐船と船主が明なのは、享保四年九月の第二十二番南京船主沈補齋がもたらした『王右軍黄庭經』一帖、『王右軍遺教經』一帖、『王右軍興福寺碑』帖の三帖である。

正徳末から享保期の長崎来航唐船の記録である『唐船進港回棹録』によれば、享保四年の二十二番船として来航した唐船の記録は次のようである。

享保四己亥年

二十二番南京　沈補齋　本年五月廿七日帶亥牌進港　庚子四月初四日丑牌回棹[40]

とある。ちなみに沈補齋は享保二年三十四番船船主[41]として来航しており、彼が享保四年に受け取った丑年の信牌をもって沈玉田と潘紹文が享保六年に来航し、二十四番南京船の船主となっている。[42]『華夷変態』によれば、沈補齋は享保二年の三十四番南京船船主として来航している。この船は上海から寧波に赴いて日本向けの貨物を搭載して 47 名が乗船して享保二年（康熙 56、1717）十月五日に寧波を出帆して十月十二日に長崎に入港している。その長崎での報告から沈補齋は、正徳三年の三十三番船の船主であったことがわかる。[43]さらに享保六年二十四番南京船で来日した船主沈田玉は沈補齋の弟であった。[44]沈玉田であるが、彭城百川の『元明書画人名録』

---

36 同書、427 頁。

37 同書、471 頁。

38 同書、492 頁。

39 同書、567 頁

40 大庭脩編『唐船進港回棹録　島原本風説書　割符留帳―近世日中交渉資料集―』関西大学東西学術研究所、1974 年 3 月、71（1-267、1-19）頁。

41 同書、69 頁。

42 同書、75 頁。

43 『華夷変態』下冊、東洋文庫、1959 年月 2774-2775（1843-3016）頁。

44 同書、2911 頁。

の「清人來舶」に、

沈陵　字玉田、號學齋、浙水人[45]

とあり、字が玉田でこの字を長崎で使用していたのであれば沈玉田となり、號學齋は兄の補齋と類似することから、この沈陵は書画に通じる才能を有し、沈補齋の弟として長崎に来航したことになり、沈補齋もそれなりの学識があったと考えられる。

このような經歴の持ち主の沈補齋が王羲之の書跡を日本にもたらしたのである。沈補齋のさらなる事跡は不明であるが、彼が享保四年（康熙58，1719）の二十二番南京船で長崎に来航した際に舶載した書物改には、王羲之関係の他に次のものが舶載されてきた。

虞世南廟堂碑一帖、文徵明十四詠一帖、趙文公浄土詩一帖、智永二躰千字文一帖、董其昌神道碑一帖、米元章百花詩一帖、草書千字文一帖。[46]

これら王羲之の書を尊崇した智永、唐の虞世南、北宋の米芾、明の文徵明、董其昌等著名な書家の作品とみられ、また趙文公浄土詩一帖であるが、趙孟頫の子で趙雍が懐浄土詩を記したとされ、趙雍も書家として著名であった[47]ことから、趙孟頫か趙雍の書であった可能性がある。

以上のことから沈補齋は、当時中国でも著名な書家の作品を中心に選んで日本に舶載した可能性が極めて高い。このことから沈補齋も書に精通していたと思われる。

このうち購入者がわかる例が文化九年（嘉慶17、1812）申一番唐船持渡別段賣の「王羲之草書　壹部一帖、王羲之古草訣帖　壹部一套四帖を購入したのが下野守である。その前に「別段賣」とは、長崎に来航した唐船の乗員が持ち込んだ個人貨物である。江戸時代後期に長崎来航した乗員達は、中国側荷主の許可を得て自己貨物を唐船に搭載さ、長崎で交易するようになる。[48]その自己貨物の中に王羲之関係の書跡が含まれていたのである。下野守であるが、文化元年（嘉慶9、1804）から天保元年（道光10、1830）にかけて幕府の老中職にあった青山忠裕（あおやまただみち）であろう。[49]青山忠裕は、丹波篠山藩四代藩主で、30年近く幕閣の重席を占め、京より儒者福井厳助[50]を招

---

45 彭城百川『元明書画人名録』下、清人來舶、シ部。

46 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』243頁。

47 臧励和等編『中国人名大辞典』上海書店、1984年8月、1416（1-1808）頁。

48 松浦章『清代海外貿易史の研究』朋友書店、2002年1月、118-142頁。
松浦章著、李小林著『清代海外貿易史研究』上、111-134頁。

49 白峰旬「江戸時代中後期における老中就任者とその在任期間について」『別府大学紀要』第47號、2006年、83-108頁。

50 福井嚴助：福井衣笠、通称嚴助、京都の人、程朱学を修め文詞を善くした。著書に『敬遠録』二巻、『春秋折中』十二巻などがある（小川貫道編『漢学者傳記及著述集覧』名著刊行会、1977年4月、435（1-781）頁）。

き藩校振徳堂を増築して藩教育を強化し[51]、また領内では京焼の陶工を招いて藩窯を開くなどの事業をおこなったことから、書芸にも精通していたと思われる。

これに対して、江戸時代の日本で再版された王羲之関係の書籍は次のようである。

宝暦七年七月　王羲之孝経　草書全一冊　板元売出し　万屋清兵衛
　　墨付二十五丁　　小川彦九郎
　　吉文字や治郎兵衛[52]

宝暦八戊寅正月　王右軍義之書　全壱帖　板元　京　田中庄兵衛
　　売出し　須原や茂兵衛
　　墨付五拾丁[53]

宝暦巳（十一）六月　王右軍帖　全一帖　吉文*字や次郎兵衛*[54]文化四丁卯六月

王右軍古千字文　全一冊　損菴老人撰　板元売出し　鴨　伊兵衛
　同十二丁　　同　　英　平吉[55]

寛政十一年十二月　王右軍論書　全一冊　赤峰書　　板元売出し　足利屋勘六[56]

享保二年（康熙 56、1717）に王羲之の書跡関係の書が輸入され、宝暦七年（乾隆 22，1757）に和刻本が出るまで、40 年の間がある。この時間差が、江戸期における王羲之の認知度の時間差と思われる。それ以降、漸次王羲之の名跡の声望が知られるようになっていったものと考えられる。

四、小結

上述のように、江戸時代の日本では 18 世紀初頭には王羲之の書跡に関する書籍が輸入され、日本の宝暦年間中期、清朝の乾隆年間の中頃にはその復刻本や再版本が出版され、廣く知られる契機になったことが知られるのである。その後、江戸時代では幕末に市川米庵が指摘するように、「真楷ハ王右軍ヲ学フヘシ」[57]と呼称され、王羲之の評価は頂点に達するようになる。その傾向は、現代まで継続し、日本の書家のみならず、一般の書法の愛好者の間でも王羲之の評価

---

[51] 「青山忠裕（あおやまただみち）」、日本歴史大辞典編集委員会編『日本歴史大辞典』河出書房新社、1973 年 12 月、1 巻 37 頁。

[52] 同書、107 頁。

[53] 同書、112 頁。

[54] 朝倉治彦、大和博幸編『享保以後江戸出版省目　新訂版』臨川書店、1993 年 12 月、177（1-612）頁。

[55] 同書、391 頁。

[56] 同書、340 頁。

[57] 馬成芬『唐船齎來法帖の研究』清文堂、2017 年 4 月、102 頁。

は極めて高い。[58]最近でも2016年4月12日から5月22日まで大阪市立美術館において特別展「王羲之から空海へ　日中の名筆　漢字とかなの競演」[59]が、ついで2018年2月10日から4月8日まで福岡県太宰府にある九州国立博物館において特別展「王羲之と日本の書」が開催され、「日本の書の母胎としての王羲之」として王羲之が紹介されている。同特別展では「喪乱帖」（宮内庁三の丸尚蔵館）や、国宝「孔侍中帖」（前田育徳会）、「妹至帖」（九州国立博物館）、「大報帖」と合わせた世界的にもトップクラスの王羲之の書4件が展示された。[60]

日本における王羲之書跡に関する高い嗜好は、江戸時代における唐船の舶載によって中国からもたらされた法帖類などの輸入や、日本での模写再版本の普及により廣く知られ、現代まで続く“書聖王羲之信仰”の土壌を形成したと言えるであろう。

---

[58] 馬成芬『唐船齎來法帖の研究』清文堂、2017年4月、109頁。

[59] 大阪市立美術館のHP参照。

[60] 九州国立博物館のHP参照。